

大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究 — 体育会運動部とスポーツサークル活動参加者の比較 —

蔵本健太* 菊池秀夫**

University Student Motivation to Participate in Organized Sports:
Comparing Intercollegiate Athletes and Intramural Club Players

Kenta KURAMOTO and Hideo KIKUCHI

Abstract

The purpose of this study was to examine university student motivation with regard to participating in organized sports. Specifically, students who participate in intercollegiate athletics and those taking part in intramural sport clubs are compared in terms of participation motivation.

Data were obtained from a questionnaire survey of 403 students belonging to intercollegiate athletic teams (n=231) and intramural sport clubs (n=172) at a university in Aichi Prefecture. Major results of the study include:

- (1) Factor analysis of motivation to participate in organized sport revealed 7 factors. The cumulative percentage of the contribution of the extracted seven factors was 68.0%. These seven factors were named "affiliation", "freedom", "health and physical fitness", "achievement", "adherence", "avoidance", and "social usefulness", respectively. The resulting factor structure was quite similar and consistent with those reported in previous studies investigating student motivation regarding sports participation.
- (2) Factor scores of the motives were calculated and compared to see if differences exist between the student group participating in intercollegiate athletics and that in intramural sports. T-tests revealed statistically significant differences for 5 of seven factor scores: "affinity", "freedom", "health and physical fitness", "achievement" and "social usefulness".

1. 緒言

近年、生涯スポーツが脚光を浴びるなか、学校スポーツの衰退が懸念されるようになった。中学、高校での運動部活動では生徒数、運動部員数、運動部数が共に減少傾向にあり、部活を受けもつ教員の高齢化も進んでおり、今後この

流れは続くものと予想される（笹川スポーツ財団、2000）。また、平成3年の大学審議会答申では大学設置基準が改定され、保健体育科目は必修から外れ、各大学の判断により開設の有無と決定がされることになった。さらに、大学生の運動部活動への加入状況（加入率）は19.4%と中学（65.4%）、高校（50.9%）に比べて低く、

*岡山県立西備養護学校, **教授

競技団体への加入状況も大学生は全体の2.8%と非常に低くなっている（笹川スポーツ財団：2000）。また近年は大学生の運動部離れが叫ばれるようになっただけでなく、大学生の体力が低下傾向にあるとの指摘もある（松元：2002、八田、2002）。

このような現状のなか、大学生のスポーツ活動を振興することは、生涯スポーツの推進や実践のためにも重要であると考えられる。生涯スポーツとは「生涯にわたる各ライフステージにおいて、生活の質（QOL）が向上するように自分自身のライフスタイルに適した運動・スポーツを継続して楽しむこと」（川西・野川、2002）と定義されるが、学生が自らのライフスタイルに応じて参加することが望まれる。この心身共に充実した時期にスポーツに親しみ、運動の理論や実践態度を身につける事は以後のスポーツライフに大きく影響するものと思われる。その点からも改めて大学生のスポーツ参加について検討することが必要である。

スポーツの振興や推進には、参加者のニーズや特性を考慮した取り組みが大切であり、充実したスポーツ環境を整えるうえでの課題でもある。本研究はこのような考え方に基づいて、大学生のスポーツへの関わり方を検証する。特に本研究では、大学生の組織スポーツへの参加動機に焦点を当てる。組織スポーツへの参加の動機を把握することは、運動部やスポーツサークルなどの指導や運営上の諸問題に対して何らかの示唆が得られるだけでなく、充実した組織運営や大学生のスポーツの活性化につながっていくものと考えられる。

2. 先行研究

(1) スポーツにおける動機づけに関する研究

スポーツにおける動機づけに関するこれまでの研究は、伊藤（2000）が日本国内の動機づけに関する研究について、理論やテーマなどで「競争」「参加動機」「達成動機」「原因帰属」「自己効力」「目標志向性」「感情」「学習性無力感」に分類してまとめている。また西田（2003）

は、海外でのスポーツにおける動機づけを自己決定理論と達成動機という点から論じている。さらに日本スポーツ心理学会（2004）は動機づけについて、スポーツ参加を支える多様な動機に注目した研究として位置づけ検討している。これらのことから分かるように、スポーツにおける動機づけの1つとしてスポーツへの参加動機がある。

(2) わが国のスポーツ参加動機に関する研究の現状

日本国内におけるスポーツへの参加動機の研究は、それほど多くない。少ないながらもその動向をみてみると、大きく2つの方向に分類される。（山本1990）。

ひとつは、スポーツ参加の動機についての研究であり、人々がスポーツに参加する理由を明らかにしようとしたものである（丹羽・村松1979、谷嶋ら1989）。もうひとつは、スポーツ集団への参加あるいは所属動機についてであり、組織的なスポーツへの参加に関するものである（山本：1990、横田：2002）。基本的に、本研究は後者の研究に位置づけられる。

しかし、スポーツ参加の動機と組織スポーツへの参加の動機は、組織スポーツがスポーツ活動を行う目的で組織されていることを考えると、両者は内容的にかなり重複する部分もあるのではないかと予想される。そのため、組織スポーツへの参加動機を考えるにあたり、スポーツ参加の動機についての研究結果もレビューの対象とした。

(3) スポーツへの参加動機に関する研究

スポーツへの参加動機に関する研究では、丹羽・村松（1979）が女子大生のスポーツ参加の動機について因子分析を用いて研究している。ここではMurray,E.D.の研究にしたがいながら運動と関連をもつ主な動機を選び、さらに丹羽ら独自の研究による内容をも加えて合計13カテゴリー77項目からなる設問を作成した。そして、因子分析を行うと共に、運動部経験期間別グループ間で分析を行ない、経験期間群間のスポーツ参加動機の違いを因子構造の次元から検討している。その結果、運動部経験期間をもと

に3群に分類し、各群に共通する因子として、人格形成因子、勧誘因子、活動性因子、探索的因子、社会的承認因子、技術的因子、美容・健康因子が得られたことなどを報告している。

次いで、谷島ら(1989)は体育学専攻生のスポーツ参加の動機について、彼らの小学校以降のスポーツ参加動機に関する研究をしている。この研究では、体育学専攻学生のスポーツ動機の特徴として、これまでの報告で多く見られた「ホメオスタシス性動機」や「運動不足の解消」、「余暇の活用」などの理由がないことが明らかにされた。

(4) 組織スポーツへの参加動機に関する研究

組織スポーツへの参加動機に関する研究では、大学生の運動部参加にどのような動機が関与しているのかを因子構造の次元から明らかにし、その違いを正選手と補欠選手とで比較しようとしたものがある(山本:1990)。山本は、Passer(1982)のスポーツ参加の動機カテゴリーを枠組みとして、52項目の質問から8つの因子を抽出し、解釈可能な7因子に回避因子、達成因子、健康・体力因子、親和因子、自由・平等因子、固執因子、社会的有用性因子と名付けている。その結果、Passerのスポーツ参加の動機カテゴリーには分類不可能な項目を「回避」と「固執」という新たなカテゴリーに分類した。これは学生が運動部に参加している理由が、「辞めるにやめられないから」、あるいは「何としても最後までやめないで続けたいから」ということを意味するものであることなどが報告された。

一方、横田(2002)は、運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動について考察している。横田の研究は一部の種目を除いて運動部活動がスポーツ活動における唯一の選択枠であるため、選択枠の不在が運動部に参加する部員に様々な歪みを強いているであろうという問題意識に立脚している。多様な参加動機と、従来のスポーツ・ドロップアウト研究で広く用いられたバーンアウトスケールを変数として、4回の時系列調査からその変動のプロセスを明らかにしている。そ

の結果、参加動機については3つの因子が抽出され、向上心・意欲因子、社会的有用性因子、競技指向性因子と名付けられた。また、中途退部者には各因子上の“閾値”が存在する可能性が示唆された。この閾値は継続や退部の意志決定の判断基準となる最低満足水準と考えられ、最も早い時期に退部した1群の値付近にその閾値があると仮定すると、退部2群はその閾値を超えた後に退部し、継続群の値はバーンアウトスケールの第3因子“コミュニケーションの低減”を除きその閾値を超えない。つまり、入部当初の部員間にみられる向上心や意欲に関する意識の差が、高い確率で中途退部に結びついており、初期値の違いと“閾値”の存在を合わせて考えると、中途退部者を予測出来る可能性もあることなどが報告された。

3. 目的

先行研究からも、参加者のスポーツへの参加動機を把握し、ニーズを掴むことの重要性が示唆されている。そのため本研究では、これまで明らかにされてきた参加動機の構造をもとに組織スポーツへの参加動機について研究を進める。具体的には、大学内の組織スポーツである体育会運動部とスポーツサークル活動に参加する学生について参加動機を把握するとともに、これら2つの組織におけるスポーツ参加動機について比較・検討を行う。

4. 研究方法

(1) データの収集

研究対象：本研究での調査は、愛知県内で体育学部を含む複数の学部をもつC大学の平成16年度の体育会運動部に所属する学生と、大学登録スポーツサークルに所属する学生を対象に行った。運動部については当該大学体育会所属の運動部から、競技レベルと部員数を考慮して4団体を選んだ。また、スポーツサークルについては登録サークルより、活動状況とメンバー数を考慮して、7種目8団体を調査の対象とし

た。具体的には部活動ではサッカー、水泳、剣道、体操であり、サークルではテニス、ハンドボール、サッカー、ラクロス、チアリーディング、アルティメット、バスケットボールである。

質問用紙の作成：山本（1990）が用いたものを参考に参加動機の項目を作成した。具体的には山本（1990）の研究で明らかにされた参加動機の7要因（親和、自由、健康・体力、達成、固執、回避、社会的有用性）について、28の質問項目を作成した。これらの項目の測定には、両極に「全くそう思わない」から「とてもそう思う」というワーディングを配置した5段階尺度を用いた。

調査方法：まずプリテストを、大学の体育会運動部とスポーツサークルに所属している学生10名を対象にして実施した。内容が理解しにくいと指摘を受けた項目については修正等を加え、最終的な質問紙を作成した。

本調査は、運動部（サッカー、水泳、剣道、体操）の4団体と、スポーツサークル（テニス、ハンドボール、サッカー、ラクロス、チアリーディング、アルティメット、バスケットボール）の7種目8団体に対して2004年7月中旬から9月中旬に行った。事前に監督や代表者などに調査依頼をして了承を得た上で、マネージャーや主務などを通して調査用紙を配布・回収した（留置調査法）。回収数は403部であり、うち運動部231部、サークル172部であった。

(2) データの分析

参加動機変数の数量化：参加動機については、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の5段階評定順にそれぞれ1, 2, 3, 4, 5の得点を与えて数量化を行い、間隔尺度を構成するものと仮定した。

参加動機の構造把握：山本（1990）を参考にして因子分析（主因子法による因子抽出とバリマックス回転）を行い、参加動機因子を抽出した。

参加動機の差の検出：先の因子分析の結果をもとに因子得点を算出し、体育会運動部とスポーツサークルの間で参加動機について各因子

得点の平均値を比較した。各因子得点の平均値の比較には、一元配置の分散分析を用いた。参加動機の差をさらに詳細に把握するため、参加動機のオリジナル変数について平均値と標準偏差を算出し、体育会運動部とスポーツサークルの2群間で比較も行った。なお、有意差の検定には5%水準を用いた。

データの処理方法：本研究におけるデータの入力、加工、分析はすべて統計解析ソフトSPSS (ver. 12.0J) を用いて行った。

5. 結果と考察

(1) 対象者の基本的属性

調査対象は体育会運動部（サッカー、水泳、剣道、体操）に所属している231名（57.3%）と、スポーツサークル（テニス、ハンドボール、サッカー、ラクロス、チアリーディング、アルティメット、バスケットボール）に所属している172名（42.8%）であった（表1）。

個人的属性は、学年では1年生が37.1%、2年生が26.9%、3年生が21.4%、4年生が14.9%であり、運動部、サークル間で大きな差はなかったが、学年が上がるにつれて調査対象者の数が減少している。

性別では男性が72.5%、女性が27.5%となり男性の方が多かった。特に運動部については男性が88.7%とほぼ9割を占めた。所属学部では体育学部が69.7%と多くなっている。運動部については93.9%が体育学部であり、サークルについては体育学部以外が62.8%となった（表2）。

(2) 参加動機の因子構造

参加動機の構造を把握するために、28の参加動機の項目について、28×28の相関行列を求め、主因子法によって、固有値が1.0以上の7因子を抽出した。これらの累積寄与率は68.0%であった。この値は、山本（1990）の研究の87.2%よりはいくぶん低くなっている。しかし、参加動機全28変数の全分散の約7割をこれら7因子で説明していることを考慮すれば、それほど低い値とも言えない（表3）。その後こ

表1. 調査対象の集計

所 属	種 目	n	%
体育会系運動部	サ ッ カ ー	92	22.8%
	水 泳	57	14.1%
	剣 道	55	13.6%
	体 操	27	6.7%
スポーツサークル	テ ニ ス	53	13.2%
	ハ ン ド ボ ー ル	26	6.5%
	サ ッ カ ー	21	5.2%
	ラ ク ロ ス	19	4.7%
	チアリーディング	19	4.7%
	アルティメット	18	4.5%
	バスケットボール	16	4.0%
合 計		403	100.0%

表2. 回答者の個人的属性

カテゴリー	所 属						合 計
	運 動 部		サ ー ク ル		n	%	
	n	%	n	%			
学 年	1年	87	37.7%	62	36.0%	149	37.1%
	2年	58	25.1%	50	29.1%	108	26.9%
	3年	48	20.8%	38	22.1%	86	21.4%
	4年	38	16.5%	22	12.8%	60	14.9%
性 別	男性	205	88.7%	87	50.6%	292	72.5%
	女性	26	11.3%	85	49.4%	111	27.5%
学 部	体育学部	217	93.9%	64	37.2%	281	69.7%
	他の学部	14	6.1%	108	62.8%	122	30.3%
出 場 状 況	毎回出場	89	38.5%	67	39.0%	156	38.7%
	時々出場	57	24.7%	62	36.0%	119	29.5%
	出場なし	85	36.8%	43	25.0%	128	31.8%

の7因子をバリマックス回転させ、参加動機の変数について因子負荷量の大きさによって並び替えた。

これらの7因子について、参加動機の変数との関連を因子負荷量の大きさによって検討、解釈を行った。以下、寄与率の高いものから順に解釈と検討を行い、それらを(1)親和、(2)自由、(3)健康・体力、(4)達成、(5)回避、(6)固

執、(7)社会的有用性、と命名することにした。次に、それぞれの因子について簡潔に説明を加える。

まず、第1因子については、運動部やサークルに参加することで友人を獲得することや、仲間との交流を目的とする項目が括られた。これらは集団所属を通しての交友関係の維持・拡大に関わる内容であると考えられるため「親和」

表3. 各因子の固有値と寄与率、累積寄与率

因子	固有値	寄与率 (%)	累積寄与率 (%)
F1 (親和)	8.235	29.4	29.4
F2 (自由)	2.716	9.7	39.1
F3 (健康・体力)	2.412	8.6	47.7
F4 (達成)	1.829	6.5	54.2
F5 (回避)	1.533	5.5	59.7
F6 (固執)	1.287	4.6	64.3
F7 (社会的有用性)	1.037	3.7	68.0

注：主因子法、バリマックス回転による

因子とした。また、この因子の寄与率は29.4%と、その他の6因子と比較して最も高くなった。

第2因子は、チームの雰囲気の自由さや、練習のあり方に関することであった。そのため、これらの動機は所属しているチームの練習への取り組み方や雰囲気に関わる内容であり、特に自由に関する項目であると考えられるため「自由」因子とした。

第3因子は、スポーツを通して体力の向上や、健康の維持・増進を目指すことに関わることであった。そのため、これらの参加動機は健康や体力に関する内容の項目であると考えられるため、「健康・体力」因子とした。

第4因子は、スポーツ集団に参加することで、技術や記録の向上を目指すことや、自分の能力を発揮することに関わることであった。これらの動機は技術の向上や目標達成の意欲に関わる内容の項目であると考えられるため「達成」因子とした。

第5因子は、運動部やサークルを辞めることにより引け目を感じたくないことや、意志が弱いと思われるのを避けることに関わりのあることであった。これらの動機は辞めることにより発生する諸問題を回避する内容の項目であると考えられるため「回避」因子とした。

第6因子は、最後まで続けることを目標にすることや、途中で辞めたという挫折感を味わいたくないことなどに関わりのあることであった。これらの動機は自己の設定した目標に固執する内容の項目であると考えられるため「固

執」因子とした。

第7因子は、スポーツを通して得られる便益や有用性に関することであった。これらの動機はスポーツを通して得られる社会的な便益に関する内容の項目であると考えられ、「社会的有用性」因子とした。

本研究の因子分析は、先行研究で示唆された尺度の検証を念頭に置いたものである。結果的に本研究で得られた結果は山本(1990)が示す参加動機の構造と大筋で一致していた。そこで、因子の解釈と因子の命名では山本(1990)のものを基本として、一部改良して用いることとした。

因子分析で得られた因子の安定性をチェックするために信頼性係数であるクロンバックの α 値を算出した。その結果、最も高い「親和」因子で.90、最も低い「回避」因子で.72の α 値が得られた。したがって、本研究で得た因子解が全体として安定した構造になっているといえる。

尚、オリジナル変数の「続けていると就職に有利だから」は、「回避」因子の下にくくられたが、本来この変数は「社会的有用性」因子を仮定したものであった。この結果は予想に反するものであり、内容的に不適切なものと判断し、以後の分析からは削除した。さらに「続けていると、チームメイトとの関係が良好でいられるから」と、「所属していることを誇りに出来るチームだから」についても、同等の理由から以後の分析からは除外した。

表4. バリマックス回転後の因子負荷行列

項目 (変数)	バリマックス回転後の因子						
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
続けていると多くの友人ができるから	.82	.10	.14	.14	.09	.15	.13
日常生活で困ったときに助けてくれる仲間がいるから	.79	.09	.13	.16	.11	.13	.08
部・サークル活動を通じて一生涯の友を得たいから	.69	.09	.23	.12	.08	.16	.09
続けていると、チームメイトとの関係が良好でいられるから	.69	.27	.15	.11	.13	.10	.02
仲間と楽しくスポーツをしたいから	.65	.20	.28	.08	-.05	.08	.13
チームの雰囲気が自由だから	.12	.81	.14	-.06	.00	.09	.04
だれもが平等に練習できるから	.16	.69	.06	.17	.01	.06	.08
厳しい規則などがなく、楽しく運動出来るから	.10	.66	.18	-.07	.01	.11	-.03
練習をおしつけられず、自主的に取り組めるから	.17	.61	.04	.25	.01	.09	.02
体力をつけるために運動したいから	.20	.07	.80	.15	.09	.11	.10
健康の維持・増進のために運動したいから	.15	.11	.77	-.04	.16	.09	.04
常に体を動かしていたいから	.27	.17	.70	.14	.04	.06	.13
日常生活でたまったストレスを発散させたいから	.29	.25	.49	-.07	.14	.17	-.04
今後も自分の技術や記録が向上するという望みがあるから	.14	.14	.03	.72	.00	.05	.12
レギュラーの座を取りたいから、あるいはずっとレギュラーでいたいから	.17	-.10	-.01	.70	.11	.11	.15
競技を楽しむために、少しでもうまくなりたいから	.12	.17	.13	.64	-.13	.01	.24
自分の能力を他人に認めてもらいたいから	.06	.04	.10	.56	.23	.19	.20
やめるとチームメイトに引け目を感じそうだから	.04	-.00	.10	-.06	.84	.11	-.04
続けないと、他人に意志の弱い人間だと思われそうでいやだから	-.01	-.03	.09	.03	.70	.16	.03
続けていると、指導者との関係が良好でいられるから	.21	.12	.09	.14	.48	.02	.08
続けていると就職に有利だから	.14	-.06	.03	.19	.37	.35	.26
最後まで続けたという満足感を味わいたいから	.20	.17	.14	.15	.13	.73	.14
部・サークル活動を最後まで続けることが目標だから	.20	.21	.15	.12	.11	.69	.12
やめたという挫折感を味わいたくないから	.12	.08	.09	.06	.37	.50	.10
スポーツをしていると、実社会に出てからも役立つと思うから	.15	.03	.19	.13	.03	.23	.73
スポーツを通して貴重な経験をしたいから	.26	.17	.12	.30	.02	.09	.59
将来、スポーツにかかわる職業に就きたいから	.00	-.05	-.04	.28	.06	.04	.55
所属していることを誇りにできるチームだから	.32	.24	.12	.30	.06	.27	.33

(3)参加動機の比較

この因子分析の結果をもとに因子得点を算出し、体育会運動部とスポーツサークル間で因子得点の平均値を比較した。運動部とサークルを比較した場合、「親和」因子、「自由」因子、「健康・体力」因子、「達成」因子、「社会的有用性」因子において、それぞれ有意差がみられた。特に、「自由」因子 (.43) と「健康・体力」因子 (.25)、「親和」因子 (.13) はサークルで強く関係があるということがわかり、「達成」因子 (.17) と「社会的有用性」因子 (.16) は運動部

で強く関係していることがわかった。このことはサークル参加者ほどチームの雰囲気にについて自由さをもとめたり、健康維持や体力の向上を目指していたり、仲間との交流を求めていることを意味していると考えられる。一方、運動部参加者では競技レベルの向上を目指していたり、今後の進路に運動部で学んだことなどを活かしたいと考えていることがわかる。

(4)参加動機のオリジナル変数の比較

それぞれの参加動機についてより詳細な差異を確認するために、体育会運動部とスポーツ

サークルに所属する学生について、各変数（オリジナル参加動機変数）の平均値と標準偏差を算出したのち、t検定を行った。

まず、「親和」因子では、サークル参加者の方が平均値は高く、「続けていると多くの友人が

出来るから」、「部・サークル活動を通じて一生涯の友を得たいから」、「仲間と楽しくスポーツをしたいから」で有意差がみられた。このことから、サークル参加者の方が運動部参加者より、友人や仲間を作ることを重視していること

表5. 因子負荷量と信頼係数

参加動機因子と項目 (変数)	因子負荷量	Cronbach's α 値
【親 和】		.90
続けていると多くの友人ができるから	.83	
日常生活で困ったときに助けてくれる仲間がいるから	.79	
部・サークル活動を通じて一生涯の友を得たいから	.70	
続けていると、チームメイトとの関係が良好でいられるから	.70	
仲間と楽しくスポーツをしたいから	.65	
【自 由】		.81
チームの雰囲気が自由だから	.82	
だれもが平等に練習できるから	.70	
厳しい規則などがなく、楽しく運動出来るから	.67	
練習をおしつけられず、自主的に取り組めるから	.61	
【健 康・体 力】		.84
体力をつけるために運動したいから	.80	
健康の維持・増進のために運動したいから	.78	
常に体を動かしていたいから	.71	
日常生活でたまったストレスを発散させたいから	.50	
【達 成】		.79
今後も自分の技術や記録が向上するという望みがあるから	.72	
レギュラーの座を取りたいから、あるいはずっとレギュラーでいたいから	.70	
競技を楽しむために、少しでもうまくなりたいから	.64	
自分の能力を他人に認めてもらいたいから	.56	
【回 避】		.72
やめるとチームメイトに引け目を感じそうだから	.85	
続けないと、他人に意志の弱い人間だと思われそうでいやだから	.70	
続けていると、指導者との関係が良好でいられるから	.49	
続けていると就職に有利だから	.37	
【固 執】		.78
最後まで続けたという満足感を味わいたいから	.74	
部・サークル活動を最後まで続けることが目標だから	.69	
やめたという挫折感を味わいたくないから	.51	
【社会的有用性】		.73
スポーツをしていると、実社会に出てからも役立つと思うから	.73	
スポーツを通して貴重な経験をしたいから	.59	
将来、スポーツにかかわる職業に就きたいから	.55	
所属していることを誇りにできるチームだから	.33	

がわかる。

次に「自由」因子と「健康・体力」因子では、これらに関わる全ての変数においてサークル参加者の方が平均値は高く、有意差がみられた。このことから、サークル参加者はチームの雰囲気や、健康の維持増進、体力トレーニングに重点を置いていることがわかる。つまり、運動部参加者はこの2つの因子に関わる事項について、サークル参加者ほど重きをおいていないことが考えられる。

「達成」因子では、運動部参加者の方が平均値は高く、「レギュラーを取りたいから、あるいはずっとレギュラーでいたいから」と「自分の能力を他人に認めてもらいたいから」の2項目で有意差がみられた。このことは競争原理が明確に存在する運動部のありかたを考えればある程度説明がつくものと思われる。

「回避」因子では「続けないと、他人に意志の弱い人間だと思われそうでいやだから」で有意差がみられた。この因子は山本（1990）の研究では寄与率が最も高かったものである。「やめるにやめれないということが運動部参加を規定する主要な要因となっており、運動部をめぐる重要な問題を提起している」と山本（1990）が説明するように、体育会運動部の特性を表していると考えられる。

「固執」因子では全ての変数で有意差はみられなかった。横田（2002）は、継続に固執する背景には、運動部に付与された教育的価値をもつ体育集団としての機能により継続が保持され

ているのではないかと、指摘している。しかし、この「固執」因子については、本研究のデータにおいては運動部とサークルともに大きな差はないことが明らかとなった。

最後に「社会的有用性」因子では、運動部の方が平均値は高く、「スポーツをしていると、実社会に出てからも役立つと思うから」と「将来、スポーツに関わる職業に就きたいから」で有意差がみられた。運動部に所属している学生の方が、サークル所属の学生より、スポーツを通しての社会的有用性を求めていることがわかる。このことは、山本（1990）が指摘する、就職などを見越して運動部への参加を続けていることと内容的に大筋で一致する。

6. 結語

本研究の目的は、大学生の組織スポーツへの参加動機について考察し、大学生のスポーツへの関わり方について運動部とスポーツサークルで比較することであった。そこで、愛知県内のC大学で体育会運動部に所属する学生と、スポーツサークル活動に参加する学生の403名を対象としてその参加動機について、質問紙調査を行いデータを収集した。分析と結果は、以下ようになった。

(1) 組織スポーツへの参加動機の構造を把握するために因子分析を行った結果、7つの因子が抽出でき、これらの累積寄与率は68.0%であった。これら7つの因子は山本の結果と大筋

表6. 運動部とサークルの因子得点の比較

因子	所属		t 値
	運動部	サークル	
(親和)	-.09	.13	-2.49*
(自由)	-.32	.43	-9.19*
(健康・体力)	-.18	.25	-4.87*
(達成)	.17	-.22	4.60*
(回避)	.05	-.07	1.44
(固執)	.00	-.00	.13
(社会的有用性)	.16	-.21	4.59*

注：*P<.05

表7. 運動部とサークルのオリジナル参加動機項目の平均値の比較

オリジナル変数	平均値		t 値
	運動部	サークル	
【親 和】			
続けていると多くの友人ができるから	3.95	4.18	-2.26*
日常生活で困ったときに助けてくれる仲間がいるから	3.75	3.84	-.83
部・サークル活動を通じて一生涯の友を得たいから	3.76	4.02	-2.29*
仲間と楽しくスポーツをしたいから	3.96	4.52	-5.88*
【自 由】			
チームの雰囲気が自由だから	2.91	3.95	-9.17*
だれもが平等に練習できるから	3.19	3.76	-5.09*
厳しい規則などがなく、楽しく運動出来るから	2.71	3.84	-9.26*
練習をおしつけられず、自主的に取り組めるから	3.45	3.81	-3.34*
【健 康 ・ 体 力】			
体力をつけるために運動したいから	3.69	4.03	-2.98*
健康の維持・増進のために運動したいから	3.50	4.06	-4.85*
常に体を動かしていたいから	3.69	4.20	-4.49*
日常生活でたまったストレスを発散させたいから	2.97	3.66	-5.67*
【達 成】			
今後も自分の技術や記録が向上するという望みがあるから	4.10	3.97	1.15
レギュラーの座を取りたいから、あるいはずっとレギュラーでいたいから	4.09	3.41	5.27*
競技を楽しむために、少しでもうまくなりたいから	4.38	4.31	.78
自分の能力を他人に認めてもらいたいから	3.71	3.39	2.54*
【回 避】			
やめるとチームメイトに引け目を感じそうだから	2.38	2.47	-.65
続けないと、他人に意志の弱い人間だと思われそうでいやだから	2.46	2.15	2.42*
続けていると、指導者との関係が良好でいられるから	2.86	2.76	.71
【固 執】			
最後まで続けたという満足感を味わいたいから	3.53	3.77	-1.74
部・サークル活動を最後まで続けることが目標だから	3.55	3.59	-.36
やめたという挫折感を味わいたくないから	3.07	3.19	-.83
【社会的有用性】			
スポーツをしていると、実社会に出てからも役立つと思うから	4.09	3.85	2.10*
スポーツを通して貴重な経験をしたいから	4.34	4.27	.67
将来、スポーツにかかわる職業に就きたいから	4.14	3.09	8.47*

注：*P<.05

項目測定については、両極に「全くそう思わない」から「とてもそう思う」というワーディングを配置した5段階尺度を用いた。これらのスケールの分析については、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の5段階評定順にそれぞれ1, 2, 3, 4, 5の得点を与えて数量化を行い、間隔尺度を構成するものと仮定した。

で一致するため、因子の解釈と因子名は山本(1990)が用いたものを一部改良して用いた。寄与率の高い順に「親和」、「自由」、「健康・体力」、「達成」、「固執」、「回避」、「社会的有用性」因子と命名した。また、これらの因子の安定性をチェックをするために信頼性係数クロンバックの α 値を算出した結果、最も高い「親和」因子で.90、最も低い「回避」因子で.72の α 値が得られ、本研究で得た因子解は全体として安定していることが確認された。

(2) 参加動機について、運動部とサークル間で因子得点を比較し、t検定を行った結果、「親和」動機、「自由」動機、「健康・体力」動機、「達成」動機、「社会的有用性」動機において、それぞれ有意差がみられた。特に、「自由」因子(.43)と「健康・体力」因子(.25)、「親和」因子(.13)はサークルで強く関係しており、「達成」因子(.17)と「社会的有用性」因子(.16)は運動部で強く関係していることが明らかとなった。

本研究を通して、大学生が体育会運動部に所属するのか、あるいはスポーツサークルに所属するのか、その参加動機の構造は複雑なものであることがあらためて確認された。しかし先行研究や本研究の結果から、参加動機の因子は比較的共通したものであることも分かった。

山本(1990)の参加動機因子と本研究の結果を比較した場合、全体的な因子はほぼ同じであったが、参加動機因子の寄与率の大小には若干の差があった。山本の研究では(1)回避、(2)達成、(3)健康・体力因子の順に寄与率が高かったのに対して、本研究では(1)親和、(2)自由、(3)健康・体力因子となった。これは本研究で明らかになったように、体育会運動部に所属する学生とスポーツサークルに参加する学生では参加動機に違いがあり、運動部員だけを対象とした山本の研究とは異なった結果になったと考えられる。

これらのことから、大学生の組織スポーツへの参加動機は運動部とサークル参加者で異なることは明らかである。参加者の多様なニーズを満たし、より広い選択肢をもってもらうため

にも、今後さらなる組織スポーツの充実が必要であるだけでなく、さまざまな参加動機をもった学生を満足させる多様な指導方法や柔軟な組織運営が重要であると言える。

7. 今後の課題

今回の研究では、大学生の組織スポーツへの参加動機について検討してきた。本研究で明らかになった組織スポーツへの参加動機の構造の理解を今後さらに深めていくためには、以下のことが課題としてあげられる。

- ①本研究では、大学内の組織スポーツである運動部とサークルに着目して研究を進めてきた。しかし、諸事情により対象を同一種目の団体に統一することが出来なかった。今後の研究では、組織スポーツへの参加動機を同一種目によって比較・検討する必要がある。
- ②今回の研究では、運動部とサークル間で比較を行ってきたが、学部の違いについては検討しなかった。特に運動部については、体育学部生の占める割合が9割を超えたため、今後は学部の違いについても検討が必要と思われる。
- ③参加動機の研究では、その変化を時系列的に把握することも必要であるかもしれない。今後の研究では、参加者の心理状態をより適切に把握するために時系列的な調査を行い、その変動プロセスについて検討することも必要ではなかろうか。

参考・引用文献

- 1) SFF 笹川スポーツ財団 (2001) スポーツ白書2010, pp.46-52
- 2) SFF 笹川スポーツ財団 (2000) スポーツライフデータ2000, pp.50
- 3) 松元剛 (2002) 大学生の体力の年次推移～筑波大学～, 体育の科学52, pp.48-51
- 4) 八田秀雄 (2002) 大学生の体力の年次推移～東京大学～, 体育の科学52, pp.39-42
- 5) 川西正志・野川春夫 (2002) 生涯スポーツ

実践論－生涯スポーツを学ぶ人たちへ－，
市村出版，pp.2

- 6) 松田岩男、杉原隆 (1990) 新版運動心理学
入門，大修館書店
- 7) 伊藤豊彦 (2000) 動機づけ研究の課題，ス
ポーツ心理学研究27，pp.73-82
- 8) 西田 保 (2003) 運動参与を高めるスポー
ツ心理学・スポーツモチベーション 体育
の科学 53，pp.348-353
- 9) スポーツ心理学会 (2004) 最新スポーツ心
理学－その奇跡と展望－，大修館書店，
pp.33-34
- 10) 丹羽劭昭・村松洋子 (1979) 女子大生のス
ポーツ参加の動機に関する因子分析的研
究，体育学研究24，pp.25-38
- 11) 谷嶋喜代志・長田一臣・福田将史・斎藤朗
・崔二準・楠本恭久 (1989) 体育専攻学生
のスポーツ参加動機に関する研究，スポー
ツ心理学研究15，pp.78-85
- 12) 山本教人 (1990) 大学運動部への参加動機
に関する正選手と補欠選手の比較，体育学
研究35，pp.109-119
- 13) 横田匡俊 (2002) 運動部活動の継続及び中
途退部にみる参加動機とバーンアウトス
ケールの変動，体育学研究47，pp.427-
437